



鎮西の素行道人像

須佐之男 すさノを ※『後漢書』の「倭國王帥升」に比定される

須佐之男 すさノを。 ※『後漢書』の「倭國王帥升」に比定される。

素戔鳴尊・建速須佐之男命ともいう。

安帝の永初元(107)年、倭國王帥升らは、生口160人を漢(後漢)の安帝に献じて、請見を願った。南朝宋范曄(はんよう、398～445)撰『後漢書』倭伝に、「安帝永初元年倭國王帥升等獻生口百六十人願請見」とある。

安帝(劉祐、永元6(94)～延光4(125))は、後漢の第六代皇帝。

永初元年は、丁未、西暦一〇七年。

※この年は、三国史記や日本書紀などの史書によると、新羅婆娑王38年、高句麗太祖王55年、百濟王己婁王31年、日本景行天皇37年に相当するが、新羅の成立は4世紀中頃と推測され、高句麗は1世紀末頃に部族連合国家を形成しはじめたと考えられ、日本では、後漢の時代はいわゆる記紀の闕史七代に相当する頃と推測され、もとより、三国史記や日本書紀などの年代は信頼できる実年代ではない。

1世紀末から2世紀初め頃の歴史を一瞥してみると、次のような動きが見られる。

章和2(西暦88)年1月、後漢第3代皇帝・章帝(中元1(56)～章和2、33歳)が没し、劉祐(のち安帝)の父・劉慶の弟和帝が10歳で即位した。和帝の母は梁貴人であったが、養母竇(とう)太后が臨朝し、后兄竇憲らの外戚が専横をきわめた。

永元3(91)年、漢廷は、班超(はんちょう、建武8～永元14)を西域都護に任じた。班超は、班彪の子で、班固の弟にあたる。兄の固が校書郎となつた後、よくその母を養ったが、ついに志をたて、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」といって、西域に出征して大功を立てたという。班超は、西域五十余国を従え、西域においては漢威が最も高かった時代であった。

永元4年、竇憲がついに大逆を謀ったので、宦官鄭衆の協力で竇氏一族を滅ぼして、和帝の親政となったが、しかし、これより、外戚と宦官の横暴が始まった。

永元6(94)年、劉祐(安帝)、誕生。

母は、側室の左小娥。父は清河孝王劉慶。祖父は第3代皇帝章帝であったが、すでに6年前に没していた。

父は、もともと章帝の皇太子とされていたが、讒言により廃されて、清河王に落とされていた。劉祐が誕生した永元6年は、和帝(建初4(79)～元興1(105)、在位章和2(88)～元興1)の7年に当たる。

劉祐は、幼い頃から学問を好み、和帝(建初4～元興1)にも可愛がられていたという。

永元14(102)年、班超は、西域にあること31年、年老いたので、帰国を願い、洛陽に帰った。

9月、班超は、持病の胸疾のため、死去した。

元興1(105)年、劉祐(安帝)、数え年12歳。

12月、和帝、没。殤帝が迎えられ、和帝皇后の鄧氏(名は綏)が臨朝し、その兄の車騎將軍鄧騭と共に、朝政を運営していた。

延平1(106)年8月、殤帝が、わずか2歳にして没すると、13歳の安帝(劉祐)が擁立された。

鄧氏の臨朝は継続し、鄧騭が朝政を運営した。

9月、西域で反乱が勃発した。

12月、安帝の実父・清河王が死去した。

永初1(107)年2月、清河國が分割された。

9月、鄧氏の母の陰氏に新野君が与えられた。

この月、西域都護が廃止された。

この月、太尉の徐防、司空の尹勤が免職され、張禹と周章が後任とされた。

十月、倭国王帥升(須佐之男)らが、生口160人を献じ、謁見を請うた。

ここに見える倭国王帥升は、記紀のスサノヲ(須佐之男・素戔鳴尊)のモデルとなった人物であろう。紀第八段一書第四では、スサノヲは新羅國に天下っており、彼の行動は、半島や大陸におよんでいたことを示している。

帥升は、倭国王とされているが、彼は、いわゆる大和地方(畿内)の王ではなく、出雲を拠点として、日本海沿岸を勢力圏とする海洋王だったのではあるまいか。帥升は、須佐之男の漢音による表記であろう。

帥升が生口を献じて謁見を願った頃の漢朝は、安帝はまだ少年であり、外戚や宦官が跋扈し、西域諸國が離反して西域都護も廃止されて西域経営が行詰まり、帝位も不安定な状況にあった。

十一月、周章が帝位の廃立を目論んだとして誅殺れ、十二月、司空の後任として、張敏が迎えられた。

素戔鳴尊のスサの名義については、荒れすさぶ意とされているが、記紀等の神話・伝説において素戔鳴尊の活躍する主たる舞台は出雲であり、スサはむしろ日本海沿岸の洲砂に由来するとみる方が良いのではあるまいか。彼はまた、放浪の神ともいわれており、半島や大陸にまで赴いていた倭国王帥升を彷彿させる。

伊耶那美命は、火の神を生み、そのために美蕃登を灸かれて終に神避り、出雲國と伯伎國との堺の比婆之山に葬られた。

伊耶那岐命は、伊耶那美命を相見んと黄泉國に追いやき、伊耶美命に、「吾と汝の國づくりは未だ竟わっていないので、還ろう」というと、「吾は黄泉戸喫をしてしまった(死者の世界の食事をとって死者の仲間入りをしたので現世には還れない)が、愛しき汝夫が迎えに来たので、還ろうとおもうので、しばらく黄泉神と相論して7みる。その間、我を視るな」と言って待たせたが、あまりにもながく待たせるので、つい、湯津々間櫛の男柱ひとつを闕き取って、一つ火を灯して見たところ、蛆が集まっていて、ごろごろ鳴り、八雷神が居た。伊耶那岐命は逃げ帰り、吾は穢き國に到ったので、禊祓をしようと竺紫日向之橘小門の阿波岐原に到り、禊祓をした。かくして身に著ける物を脱がすに因り衝立船戸神以下十二神を生み、中瀬に滌ぐ時に八十禍津日神などを生み、さらに十柱の神を生み、そして左の目を洗う時に天照大御神、右の目を洗う時に月読命、鼻を洗う時に建速須佐之男命を生んだという。

【参考A】和銅五年正月 太安万侶撰録『古事記』上卷(岩波・日本思想大系1)

於是、左ノ御目を洗ひます時、所成りませる神ノ名は、天照大御神。次に、右ノ御目を洗ひま

す時、所成りませる神ノ名は、月読命。次に、御鼻を洗ひます時、所成りませる神ノ名は、建速須佐之男命。〈須佐ノ二字は音を以ゐる。〉

右ノ件ノ八十禍津日神より以下、速須佐之男命より以前ノ十柱ノ神者、御身を滌くに因りて所生りませる者也。

此ノ時、伊耶那伎命大く歡喜ビて詔らさく、「吾者子生み〃み而、生みノ終於三はしらノ貴き子得たり。」トノらす即ち、其ノ御頸珠之玉ノ緒、母由良迹、〈此ノ四字は音を以ゐる。下は此に效ふ。〉取り由良迦志而、天照大御神に賜ひ而詔之らさく、「汝命者、高天ノ原矣所知らせ。」ト、事依さし而賜ひき。故、其ノ御頸珠ノ名は、御倉板拳之神ト謂ふ。〈板拳を訓みて多那ト云ふ。〉次に、月読命に詔らさく、「汝命者、夜之食国矣所知らせ。」ト事依さしき。〈食を訓みて袁須と云ふ。〉次に、建速須佐之男命に詔らさく、「汝命者、海原矣所知らせ。」ト事依さしき。

これは、もとより天上の神々の世界の話であるが、しかし、それなりに列島の実勢を反映している。天照大御神の所知す高天原は、列島の中原ともいべき大和盆地を中心とした畿内、月読命の所知する夜之食国は、日の神である天照大神に対する月読命であり、夜之とあるが、ようするに食国すなわち食料生産地帯たる農村すなわち地方支配、そして建速須佐之男命は海原すなわち出雲を中心とする日本海沿岸海上王国の支配を指している。しかも、ここには、天下三分の思想を反映しているようでもある。勿論、当時の列島が、このように三分されていたということではないが、そのような社会が描かれるようになっていたところをも示している。

古事記に登場する神々には、独神と称される単独の神と、宇比地迹神・妹須比智迹神のように男女対になった二神で登場するものと、底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神のように三神の構成をとるものがある。

記紀の神話の中で、三神の構成をとるものは、「住吉・綿津見・宗像など、海洋系の神に見られる特色である」(昭和57年2月石母田正ほか校注『古事記』上巻補注42)と指摘されている。

天照大御神・月読命・建速須佐之男命の三神は、かならずしもトリオをなすものではないが、天照大御神は高天ノ原、月読命は夜之食国、建速須佐之男は海原を所知らすというように、三神によって世界を分知する構成になっている。

類似の話は、日本書紀の神代上第五段一書第六にも収録されている。

【参考B】養老四年五月 舍人親王ほか『日本書紀』神代上第五段一書第六一書〔第六〕に曰はく、伊弉諾尊と伊弉冉尊と、共に大八洲國を生みたまふ。然して後に、伊弉諾尊の曰はく、「我が生める國、唯朝霧のみ有りて、薰り満てるかな」とのたまひて、乃ち吹き撥心氣、神と化爲る。號を級長戸邊命と曰す。亦是級長津彦命と曰す。是、風神なり。又飢しかりし時に生めりし兒を、倉稻魂命と號す。又、生めりし海神等を、少童命と號す。山神等を山祇と號す。水門神等を速秋津日命と號す。木神等を句句迺馳と號す。土神を埴安神と號す。然して後に、悉に萬物を生む。火神軻遇突智が生るるに至りて、其の母伊弉冉尊、焦かれて化去りましぬ。(中略)故、吾が身の濁穢を滌ひ去てむ」とのたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸の橘の櫛原に至りまして、祓ぎ除へたまふ(中略)然して後に、左の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて天照大神と曰す。復右の眼を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて月讀尊と曰す。復鼻

を洗ひたまふ。因りて生める神を、號けて素戔鳴尊と曰す。凡て三の神ます。已にして伊弉諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、以て高天原を治すべし。月讀尊は、以て滄海原の潮の八百重を治すべし。素戔鳴尊は、以て天下を治すべし」とのたまふ。

是の時に、素戔鳴尊、年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。然れども天下を治さずして、常に啼き泣ち恚恨(ふつく)む。故、伊弉諾尊問ひて曰はく、「汝は何の故にか恒に如此啼く」とのたまふ。對へて曰したまはく、「吾は母に根國に従はむと欲ひて只に泣かくのみ」とまうしたまふ。伊弉諾尊惡みて曰はく、「情の任に行ね」とのたまひて、乃ち逐りき。

ここには、「天下を治す」というような、国家統一後の6世紀頃の政治観による記述と想われるような文言もあり、かなり後世の粉飾がみられるが、話の骨格は、古事記に似ている。

しかし、日本書紀の第五段本文の誕生譚は、やや異なっている。

【参考C】養老四年五月 舍人親王ほか『日本書紀』神代上第五段本文

次に海原を生む。次に川を生む。次に山を生む。次に木の祖句句迺馳を生む。次に草の祖草野姫を生む。亦是野槌と名く。既にして伊弉諾尊・伊弉冉尊、共に議りて曰はく、「吾已に大八洲國及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」とのたまふ。是に、共に日の神を生みまつりす。大日靈貴と號す。大日靈貴、此をば於保日屢咩能武智と云ふ。靈の音は力丁の反。一書に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。故、二の神喜びて曰はく、「吾が息多ありと雖も、未だ若此靈に異しき兒有らず。久しく此の國に留めまつるべからず。自づから當に早に天に送りて、授くるに天上の事を以てすべし」とのたまふ。是の時に、天地、相去ること未だ遠からず。故、天柱を以て、天上に擧ぐ。次に月の神を生みまつります。一書に云はく、月弓尊、月夜見尊、月讀尊といふ。其の光彩しきこと、日に亞げり。以て日に配べて治すべし。故、亦天に送りまつる。次に蛭兒を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫛樟船に載せて、風の順に放ち棄つ。次に素戔鳴尊を生みまつりす。一書に云はく、神素戔鳴尊、速素戔鳴尊といふ。

紀の本文では、伊弉諾・伊弉冉の二神は、天柱を廻り、共爲夫婦して、大八洲國および山川草木を生み、「何ぞ天下の主者を生まざらむ」として、日の神・月の神を生んだ。そして、次に蛭兒が生まれたが、三歳になるまで脚が立たず、天磐櫛樟船に載せて放棄し、次に素戔鳴尊を生んだとなっている。ここには、「吾已に大八洲國及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ」といった、統一国家時代の思想を強く反映した記述になっている。

素戔鳴尊神話は、ただ倭国王帥升の時代だけではなく、複数の時代の複数の人物をモデルとして産まれた、記紀神話の中でも、特に複雑な神格を持った物語となっている。

しかし、須佐之男(素戔鳴尊)は、海原を治らすとあることから、その活躍の主たる世界は、日本海から九州北部沿岸におよぶ海洋にあったと推測される。

(製作中)



Last updated 2019/04/11 08:56:16 AM

コメント(0) | [コメントを書く](#)

1. [人物史攷] カテゴリの最新記事

木付鎮直(生年未詳～文禄2) きつき・しげなお

木付鎮直(生年未詳～文禄2(1593)) きつき・しげなお。

年未詳、誕生。母は生地玄蕃丞安清の女。父は木付鎮秀。

天正八(1580)年、鎮直は、田原親貫が大友宗家に対立して安岐郷に籠もったため、大友義統の命により、これを攻めた。

天正十四(1586)年、島津氏の豊後侵入に際し、新納忠元の軍勢を木付城に籠もって退けた。

文禄二(1593)年、大友義統が豊臣秀吉から臆病者として召還された時、義統に従った鎮直の子統直が門司の海峡で入水。これを聞いた鎮直夫妻も、義統の屈辱を思い自殺した。鎮直の法名は、順慶院殿芳雄宗円大居士。夫人は月桂院殿泰安長映大姉。墓は杵築市鴨川桶屋敷の西方に現存している。

【参考文献】

☆平成2年9月(平成7年第7刷)阿部猛ほか『戦国人名事典(コンパクト版)』新人物往来社。

(製作中)